

いたずらな 女子大生従妹

伊吹泰郎

挿絵／相田麻希

立ち読み版

KTC
KILL TIME COMMUNICATION

プロローグ	4
第一章 再会と驚きと	9
第二章 新歓コンパの後で	30
第三章 童貞卒業	76
第四章 七年越しの夢	129
第五章 危ない入れ知恵	182
第六章 淫らなカップル	234
エピローグ	277

登場人物

Characters

橘 麻耶

(たちばな まや)

亮太郎の従妹であり、彼の大学の後輩でもある一年生。胸が豊かでスタイルが良く、端正な顔立ちに華やかなメイクの美少女。子供の頃から亮太郎を恋い慕っている。

笛木 亮太郎

(ふえき りょうたろう)

麻耶の従兄で、京央大学二年生。真面目で少々融通の利かない性格。麻耶とともにテニスサークルに所属している。

鮎貝 ひかり

(あゆかい ひかり)

麻耶と亮太郎が所属するテニスサークルの部長。優しく頼りになる性格で、部員たちから慕われている。

水谷 大樹

(みずたに だいき)

テニスサークル所属で亮太郎の友人。ひかりの恋人。



第二章 新歓コンパの後で

——はじめまして、橘麻耶ですつ。テニスは全くの初心者ですが、どうぞよろしくお願います！——

当初の希望通り、麻耶は大学へ入った翌日にサークルへ入会届を提出した。

初心者というのは謙遜でなく、練習も基礎中の基礎から始めなければならなかったが、当人はそれを楽しんでおり、一週間のうちにはサークルのアウトホームな空気とも完璧に馴染んでいた。

「明るくていい子よね」

と感想を漏らすのは現部長で、ゴールデンウィーク明けに引き継ぎする予定の鮎貝あゆかいひかりだ。彼女が眺める先では、麻耶が先輩の加藤美琴かとうみことにフォームの確認をしてもらっている最中。

「大学だと猫をかぶってるんですよ」

ひかりと並んだ亮太郎は、無造作にラケットを肩へ乗せつつ返事する。

「あ、それってなんとなく分かるわ。笛木君の前でだけ見せる顔とか、あるのよね？」
「い、いえっ。そういう可愛げのあるもんじゃなくて……っ」

部屋で寝転がった麻耶を思い出して、赤面しかける亮太郎。確かにああいう姿は、サークルの面々に見せていない。が、部長の言うのは、意味合いが違うはずだ。

うろたえる後輩に、ひかりは綺麗な瞳を細めた。

「あーあ、もうすぐ引退しなくちゃいけないなんて残念。もっと麻耶ちゃんを近くで見たいのに」

「えっ？ あいつ、そんなに素質がありそうですか？」

今の口ぶりからすると、お世辞などではなく、本心からの言葉らしい。そこまで高評価とは驚きだった。

しかし、ひかりは気が抜けたように苦笑した。

「というか、麻耶ちゃんには親しみを感じるの。どうしても気になっちゃうのよね」

「……そういうことですか」
「……そうしたら、納得だ。」

実は亮太郎が麻耶を久しぶりに見て似ていると直感したのが、このひかりなのである。ひかりはスタイルがよく、悪戯っぽい笑顔の似合う華やかな美人だ。その上、時

に男性顔負けの行動力を見せる。

もつとも、実際に二人を比べると、違いも多く目についた。たとえば、ひかりは年上らしい面倒見のよさや落ち着きを持っているが、麻耶は子供っぽさが抜けきれていない。

まあ、それも余計な保護者気分が抜けていない故の色眼鏡かもしれない。麻耶だって子供ではない。おせっかいなど迷惑に決まってるのに。

——こんな反省をするのも、今回が初めてではなかった。少年が密かに嘆息していると、ひかりが口の端を上げる。

「気になったきっかけはね、サークルに入って二、三日の間、麻耶ちゃんがわたしを睨んでたつてことなの。ただし、あるタイミング限定で」

「え？」

面食らう。

ひかりに気を悪くした様子はない。むしろ、おもしろがっている。だが、部長を睨むなんて問題有りだろう。

少年は従妹の代わりに、ペコリと頭を下げた。

「すいません。多分、悪気があったんじゃない、やる気が表に出たとか、そういう理

由なんだと思います。後で当人からも話を聞いてみます」

すると、ひかりは慌てたように両手を振った。

「だ、駄目よ、そんなことしちゃ……っ！ はあっ、これは先が思いやられるというか……」

言って、おおげさに肩を落とす部長。もつとも、すぐにニンマリと見上げてきた。

「やっぱり麻耶ちゃんのこと、近くで見守りたくなっちゃうわね」

冗談めかした口ぶりに、亮太郎は諸手を上げて降参したくなった。

麻耶も、ひかりも、考え方に謎が多すぎである。

その次の土曜日。学校近くの居酒屋で、サークルの新歓コンパが開かれた。

「……かわいい一年生がたくさん入った。それは嬉しいんだ。けどなっ!!」

開始十分で早くも呂律ろれつが回らなくなっているのは、亮太郎と同じく二年生の田所たどころ恭平だ。彼は演説の合間にグツとビールの入ったジョッキを叩あおつて、酒臭い息を吐く。それからまた拳を振り上げた。

「入れ替わりに四年のお姉さま方が引退しなくちゃならん。俺は残念でならないよ！」
「田所君、悔しいのは分かったから。それぐらいにしておいた方がいいって」

亮太郎とも気の合うもう一人の二年生、水谷大樹みずたにだいきが苦笑気味に恭平の世話を焼いている。大樹は中肉中背、人のよさがにじみ出る顔立ちで、ひかりの従弟兼恋人だ。

しかし、友人の手を恭平はおおげさに払った。

「お前は全然分かっていない！ 分かっているなら鮎貝さんに頭を下げて、もう一年はいてもらうべきだ！ というか、卒業後も毎日来てもらえ！」

「無茶言わないでよ」

絡まれつつも、大樹はあくまで温厚だ。亮太郎は見かねて口を出した。

「田所、それぐらいにしておけよ。二十歳になるまで、俺達はまだ間があるだろうが」「やかましい、この朴念仁！ お前らはいいいよ？ どっちも美人の従姉妹がいてさあ。俺の従姉なんかなあ！ クラゲそっくりなんだぞっ！」

どんな従姉だとツッコミたくなるが、悪友は急に声を潜めだした。

「でさ、お前ら……鮎貝さんと橘ちゃん、夜とかどんな感じなわけ？」

「どんな感じ、とは？」

「とぼけるなつての、こんちくしょー。お前らなら桃色エピソードもたくさん知っているだろうが。昨日は？ 一昨日はどうだったよ？」

「え、別に、普通だった、けど……？」

恭平は時々こういう話題を振ってくる。答える大樹の視線はいささか泳いでいたが、恋人同士なら色々あるのだろう。ここで追及するほど亮太郎も馬鹿ではなく、便乗してしらばっくれることにした。

「……同じくだ。大体、俺と麻耶は久しぶりに会ったんだ。特別な関係ってわけじゃない」

「嘘吐くなつての」

そこへ麻耶が唐突に現れた。

「あー、先輩達が内緒話してるう」

彼女はやけにテンションが高い。見れば、顔が赤く染まり、目元はしどけなく緩んでいた。足元も覚束なくて、右へヨタヨタ、左へヨタヨタ。

「三人だけの世界なんて、ちょっとやらしいなあ」

言つて、しりもちをつくように亮太郎と恭平の間へ割り込む。

着ているのはアルファベットのロゴが印刷された黄色いシャツと、白のショートパンツだ。首には今やトレードマークとなった鍵型のチョーカー。

シャツは胸元へピッタリ張りついており、身長と不釣り合いなバストのポリウムが、はつきり分かる。というより、布地がはち切れそうで、亮太郎は従妹が服のサイ

ズを間違えたのかと心配になってきた。

腰から下も大胆で、ムチツとした太腿が付け根からむき出しだ。ヒップの丸みも綺麗に浮き出ている。

「未成年が飲みすぎると田所みたいになるぞ」

亮太郎が注意しても、麻耶はどこ吹く風だった。むしろ、手にしていたビール瓶を恭平の方へ向けて、にこやかに笑う。

「田所先輩、どうぞっ」

「お、ありがとなあ。橘ちゃんはいいい子だ。こっちの石頭とは大違い！」

涼やかな黄金色の液体が、ジョッキいっぱい注がれる。田所はそれをグビグビツと飲み干した。

「んっ、美味いっ！」

「ふふっ、田所先輩ってお酒好きなんですなあ」

「おう。橘ちゃんが注いでくれるビールは特に好きだ！ 笛木、お前も飲めよ！」

「ほらほら、亮太郎先輩っ。田所先輩も言ってるんだからあ」

「……まったく」

亮太郎はぼやき混じりにグラスを出す。

それにしても、千鳥足になった麻耶は危なっかしくてしょうがない。色っぽいことは認めるが、背伸びをしている印象も強まってしまう。どうしたものかと考えていると、

「おっと、笛木がエロ顔になってる！」

恭平のからかう声が飛んできた。

「そんなわけあるかっ」

ごまかすように注がれたばかりのビールを一気飲み。途端にますます顔が熱くなつた。

恭平もしつこく、

「いいや、今のは橘ちゃんで妄想してる顔だった！」

「え？ 亮太郎先輩、そんなこと考えちゃったの？」

麻耶までが興味を示し、パツチリした目をしばたかせた。人前だと猫をかぶる彼女だが、酔って上手く振る舞えなくなっているらしい。

「まあまあ、二人とも」

大樹だけは助け舟を出してくれるが、こういう時、彼は人がよすぎて、あまり頼りにならない。一緒に弄られ役となってしまうパターンが多いのだ。

そこへもひかりもやってきた。彼女は白いシャツにネイビーブルーのミニスカート姿で、首には蝶の形のシルバーアクセサリー。他の先輩の話によると、ひかりがスカートを穿くようになったのは、大樹と付き合い始めてからだとか。

「うふふっ、こっちも楽しんでるみたいね。うん、結構結構」

サークルの美人部長も、アルコールが入って、頬が色っぽく染まっていた。そこへすかさず麻耶が瓶を差し出す。

「ひかり先輩もどうぞおっ」

「ええ、いただくわ」

ひかりはビールを注いでもらうと、恭平に負けない勢いで飲み干した。ただし、グラスを唇から離れた後に見せる微笑は、ドキリとなるほどセクシーだ。

「ありがと、麻耶ちゃん」

「先輩もかなりイケるんですねっ」

「ちよつとは自信あるかしら。……ごめんなさい。大樹君を借りていくわね。大樹君、あつちで美琴達が呼んでるの」

そのまま従弟の手を取って、立ち上がるひかり。

「あ、うん」

と大樹も彼女に従った。

(俺もどこかへ場所を移すか?)

一瞬迷う亮太郎だったが、麻耶と恭平だけを残すのも不安で、結局ひかり達を見送ることになった。二人が去った後で視線をズラせば、相変わらず麻耶がニコニコしている。

「じゃあ話の続きね。あたしを見て、何を想像しちゃったの？ お兄ちゃん？」

「っ……」

サラリと飛び出した昔の呼び方に、つい腰を浮かせかける。

恭平も聞き逃すはずがない。

「お、お、おとおおお兄ちゃん!! お前、橘ちゃんにそんな呼び方させてるのか!!

このド変態野郎！」

「えへへえ、やっぱりこの呼び方の方が落ち着くなあ」

(く、くそ……っ)

——やっぱり逃げるのが正解だったらしい。

コンパは二次会三次会と続き、解散したのは十二時近くになってからだった。

「じゃ、また来週ー」「ちゃんと家に帰れよお」

めいめい手を振るサークルメンバーと別れ、亮太郎は人気の絶えた道を、酔い覚ましがてら歩く。

結局、恭平達の勢いに押され、ビールと日本酒を次々飲まされてしまった。今も身体に火照りが残り、気分はいつになく高揚している。四月半ばの肌寒い夜気が、却って心地よかった。

とはいえ、のんびり帰宅中というわけではない。

「んっふっふう、お兄ちゃん先ばあい……」

腕には、麻耶がしなだれかかっている。彼女はほろ酔いどころか泥酔同然で、一人だと真っ直ぐ歩くのさえ不可能だ。

——もう遅いんだから、お兄ちゃん先輩が麻耶ちゃんを送ってあげなきゃ駄目よ？

というのが、ひかりからの指示だった。それ自体は言われるまでもないが、珍奇なあだ名まで付けられたのは困りものである。

(週明けには忘れててくれるといいんだが……)

ともあれ、今は麻耶がしがみつくといいいで、愛くるしい巨乳を押しつけられっぱなし

だ。

「もうちよつと離れられないか？」

亮太郎は尋ねてみるが、そのたびに返事は同じ。

「やだあ」

麻耶はむしろ力を強め、バストの温もりと柔らかさを、これでもかと伝えてくる。徒歩の振動でユサユサと揺らしもする。

「あいな、麻耶……」

「やだつたらあ、やあだつ」

背中越しの触れ合いも悩ましいが、こうして並んでいると、乳房がどうたわんでいるかよく見えて、一段と官能的だ。

ピンと張っていたところを圧されたシャツは、一部が伸び、一部が皺になって、プリントが妙な具合に歪んでいる。そのうち、ブラのカップが膨らみの変形に対応しきれなくなつて、ツルンと取り落としてしまうのではないか。そんな想像が、亮太郎の酔った脳裏をかすめた。

豊満な感触と危険な見た目——ペニスも反応し、ムクムクと膨張しそうだ。すでにその前兆は大有りで、竿も先端も見えない手が這いずつているようにむず痒い。

(……と、とにかくつ、今日はこいつが楽しんでよかつた……!)

勃起の危険を少しでも減らそうと、少年は目線を胸から従妹の顔へ移す。

街灯に照らされた麻耶は、大きな目を細めて、実に満足そう。

ちよつと子猫を連想させられる表情だった。

「ほら、着いたぞ」

亮太郎はようやく麻耶のワンルームマンションまでたどり着き、彼女から借りた鍵でドアを開けた。さらに入つてすぐのところにあつた蛍光灯のスイッチを入れる。

パツと明るくなる室内を見回せば、そこは少女らしい内装に整えられていた。

薄い色合いのカーテン、家具。あちこちの小物類。壁にかけられた動物の写真のカレンダー。

だが、住み始めてまだ半月と少しだからか、生活感がやや希薄にも感じられる。麻耶のカラーに染まりきつていないというべきかもしれない。

(……つと、批評してる場合じゃないか)

亮太郎は鍵を掛け直すと、麻耶の靴を脱がせ、自分も部屋へ上がり込んだ。

麻耶に肩を貸しながらベッドまで連れて行き、端へゆつくり座らせる。

「ほら、しつかりしろ。調子はどうか？ 気持ち悪くないか？」

「んう、ええとね……」

麻耶が甘えるように見上げてきた。桜色の頬と大きな瞳の組み合わせは破壊力抜群で、少年も心のど真ん中を射抜かれる。

「な、なんだ？ どうした？」

ドギマギしながら尋ねると、

「お水欲しい。冷蔵庫に入ってるからあ……」

「分かった」

亮太郎は部屋の隅の小さな冷蔵庫へ足早に近づいた。

開けたドアのところ一本だけあったミネラルウォーターのペットボトルを取り、ベッドまで戻る。

「んっ、ありがとお」

麻耶は受け取ったボトルの封を開けると、勢いよくラッパ飲みを開始。コクツ、コクツと、反らせた細い喉を何度も波打たせた。

「……………」

それは何の変哲もない仕草のはずだ。なのに、亮太郎は見ていて艶めかしさを感じ

てしまう。しかも、こぼれた水が一雫、舐めるように柔肌を滑り——これまた扇情的だった。

「うっ……」

少年は無意識に一步下がった。そんな従兄の前で、麻耶はペットボトルの蓋を閉め直し、鍵型のチャージャーを掴む。たおやかな指は金属の表面を何度かなぞった後、おもむろにTシャツの襟元へ移動して、黄色い布地を。パタパタと前後させ始めた。

「うう、この部屋……暑い」

溶けかけのような、しどけない声が漏れる。

確かに、閉め切られたところへ帰ってきたばかりだから、暑がるのも当然だ。

しかし、麻耶の行動は無警戒すぎて、見下ろす亮太郎からは、ブラジャーのストラップが垣間見えてしまった。

それにシャツはカップで押し上げられていて、ろくな隙間もない。空気が送られているとは思えなかった。むしろ、巨乳を引きずるように上下させていて——

「……っ」

途中で気付いた亮太郎は顔を背けるが、すでに手遅れ。

「ね……先輩、あたしの胸見てたでしょ？」

麻耶から意地悪い質問が来てしまう。

「見てない！」

否定しつつ横目を向ければ、従妹は手をチャーカーに戻しながら、ジロジロと亮太郎を眺めていた。ただし、顔ではなく、股間の方を。

「ふふっ、嘘ばっかり。ちよつと勃たつてきちやつてるんじゃないかなあ……」

「おい!!」

亮太郎は思わずズボンの前を押さえた。

「ああん、先輩ってば慌てすぎ……っ。全然女の子に免疫がないから、そんな風になつちやうのよ」

「う、うるさいっ……」

「だって本当でしょ？ 大学生にもなって、女の子とキスしたことさえないんじゃないの？」

「それは……お、俺だつてな……」

分が悪いと思いつつ、反論の言葉を探す。

「俺だつて……なあに？」

「お、俺だつてな……!」

もう引つ込みがつかなかった。

「俺だって、色恋の経験ぐらいある！ め、免疫もできてる！」

しかし、怒鳴っている途中から、自分の後頭部を叩きたくなる。いくらなんでも見栄を張っているのがバレバレだ。

麻耶もフツと冷めたような目つきになって、言い捨てた。

「また嘘」

「嘘じゃない！」

「ふうん……？」

少女は身体を傾ける。またもや色々な角度から従兄の股間と顔を見比べた。

亮太郎としては居心地の悪いことこの上ないが、今さら逃げるわけにもいかない。やがて姿勢を正した従妹は、小さく咳払い。

「だったら、あたしが試してあげる。本当に免疫できてるのかどうか……」

「何？」

「だからあ……こうやってね……っ……」

突然、腕を伸ばし、ズボンにかぶさる亮太郎の手をどけた。

「な……っ！」

少年も飛び退こうとするが、麻耶は早口で叫んだ。

「逃げちゃ駄目！」

驚くほどの大声だった。それから若干トーンを落とし、

「嘘じゃないんでしょ？」

「む……」

探るような眼差しに、仕方なく亮太郎も踏みとどまった。

「どうするつもりなんだ……？」

「女の子に慣れてるなら、ちよつとおちんちん弄られたぐらいで、イッたりしないわよね？ だから、あたしが触ってみるの。……十分間耐えたら、さっきの話も信用してあげる」

「あのな……」

ふざけているのかと思ったが、麻耶は本気のようにだ。視線はどこか挑むようでさえあり、ともすれば頑固な少年の方が怯みかける。

結局、折れたのも亮太郎だった。

「………わ、分かった」

馬鹿な返事をしてると思うが、免疫なんてありません、今のは嘘でした、などと

訂正するのは嫌だったし、麻耶にヘタレと思われたくない。

「い、いいか、十分だけだぞ?」

「うんっ、ありがと。先輩っ」

強気な態度から一転、従妹が浮かべたのは、ホツとしたようなはにかみ笑いだ。

しかし、彼女はすぐそれをひっこめる。床へ降り、膝立ちになって、ズボンへ指をかけ直してきた。――アルコールが抜けていないからか、手つきはぎこちなく、ベルトを外すのにも一苦労のようだ。

「ん……あれ……あれっ?」

亮太郎からすれば、リアクションに困る数秒だった。待っている間に、腋の下へ汗が浮いて、喉も渴いてくる。放り出されたペットボトルを拾い上げ、残った水を呷りたかった。

それでもどうにか麻耶はバックルを開き、ズボンのホックとファスナーも外す。

支えをなくすと、ズボンは脚全体をなぞって足首まで落ちた。

「う……」

早くもくすぐったさに苛まれ、亮太郎は喉の渴きを忘れる。緊張のためか、明らかに皮膚は感じやすくなっていた。

しかし、少年が身じろぎしても麻耶は構わない。トランクスを掴み、ゴムの縫い込まれた縁を慎重に持ち上げ、ゆるゆると腿まで脱がせてしまう。

「あ……ン」「……っ」

出てきたペニスに、麻耶は喉を鳴らし、亮太郎は眩暈めまいを覚えた。

勃起しているわけでもないのに、男性器の亀頭は丸々して、竿もガツシリ太め。双方の境には段差までできている。根元にも剛毛といえる猛々しさの陰毛が、モジャモジャ生えていた。

生の性器を誰かに観察された経験など、彼は今まで一度もない。顔の熱が上がり、頭のふらつきも収まらないまま、麻耶の目に自分のものはどう映っているのか——そんなことが無性に気になった。

「じゃあ……ここから十分ね」

麻耶は念を押した上で、右手を竿の部分へ添えてきた。感触を確かめるように表面を軽くさすつてから、キュッと中ほどを握る。

「つつ……!」

触られた瞬間から男根は切なくなり、掴まれるや、澱みのような悩ましさが芯まで雪崩れ込んだ。少女の手は小さいながらも、日々ラケットを使っているので少し皮が

厚い。その分、牡肉はしつかり押さえられた。

「こういう握り方で……どう？」

従妹の言葉責めに對し、亮太郎は一応強がってみせる。

「全然……平氣だぞっ」

しかし、出だしからここまで感じてしまうなど、全くの予想外。親しい従妹に手コキをされるのは、覚悟したより遙かに理性を揺さぶられることだった。まして麻耶は文句なしに美少女で、ボディラインが丸見えの格好をしているのだ。手がどう動くかも読めないから、心の準備だつてしようがない。

(まず……い……)

一方でペニスは正直にグングン膨らんできた。倍以上も太くなってそそり立ち、先端を麻耶に突きつける。竿へはグロテスクな血管が浮き、鈴口の綻びようも劣情をアピールするかのよう。

「あっ……やっ……」

息を飲みかける麻耶だったが、

「んん……んっ、やっぱり、興奮してるんじゃない……っ、すごく硬くなつて……やらしいおちんちんなんだからあ……」

次の瞬間には悩ましく声を上ずらせ、手を操り出した。

まずはカリ首まで丁寧な掌を昇らせる。次いでズンと根元へ落とす。そろそろと亀頭へ戻し、また下げる。

溜めた力を、まとめて押しつけてくるようなやり方だ。手が上がりかける一瞬は快感の波も和らぐものの、亮太郎は気を抜く余裕ももらえないまま、亀頭の裏を小突き上げられる。痺れで包囲されたカリ首は、直後に反対側へ引つ張られ、さらなる凶悪な疼きに見舞われる。

「うっ……うっ……くっ！」

愉悦は着実に積まれていった。

しかも、麻耶は次第に掌へ汗を滲ませてくる。そのせいで奉仕は力強さをそのまま、速さまでアップ。一回目より二回目、二回目より三回目。だんだん上がってくるリズムに、肉竿の表面はバネでも仕込まれたかのごとく伸び縮みさせられた。

「うっ……くっ、くっ……！」

亮太郎は手を握り、歯を食いしばる。目も無意識にきつく閉ざしていたが、

「あ、はっ……ヌルヌルしたのが出てきて……。男の人ってこれを塗ってあげると、もつと気持ちよくなれるのよね……」

美少女の実況までは、防ぎようがなかった。さらにセリフの途中で、実際に左手が鈴口へかぶせられる。

「くあつ!! お……うおおつ!!」

性感帯の塊を圧されて、少年は奇声を上げてしまった。

「そ、それは……麻耶っ!!」

「んっ……あつ……あはっ……効き目あつたみたい……っ」

興奮したか、淫熱を帯びる麻耶の声。

だが亮太郎には答えられない。彼が受けたのは、一瞬で股間を満たした上、怒濤の勢いで脳天へ突き抜ける強烈な感覚だ。

「あ……ふっ、ん……いい子、いい子……」

麻耶は幼児の頭を撫でるように、左掌で円を描きだした。我慢汁をまぶされた亀頭は全体が疼きの源と化し、魂を奪いそうな肉悦も広範囲で暴れ出す。

「うっ……くっ、これ以上は……待て……っつてっ!!」

訴えも虚しく、掌はエラまで侵略。逞しく張り出すそこへ、麻耶は特に先走り汁を
広げた。

緩々と側面を縁取り、窪みの裏へも万遍なく。

「おおおっ!!」

敏感な裏筋まで捏ねられて、亮太郎は膝どころか腰ごとカクンと前に倒れかけた。咄嗟に麻耶の頭を両手で押さえるものの、もはや彼女の支えがなければ、姿勢を保てそうにない。とはいえ、手入れをされた明るい茶色の髪は手触りがよく、指先までくすぐったくなってしまう。

際どい解説だつて継続中だ。

「や……あんっ……ネバネバいっぱい……っ、おちんちん……溶けてきちゃったみたい……っ……ねえ……これって……まだ大丈夫なのよね……?」

分かっているだろうに、わざわざ質問してくる。そこへニチャニチャと我慢汁の猥雑な音まで混じった。

（いやっ……喋ってるのもやってるのも、あの麻耶なんだ！俺が昔から知ってる……い、妹みたいな存在で……っ、だから……いやらしい目で見たら駄目だ！）

かつての屈託ない麻耶を、亮太郎は必死に思い出そうとした。いたずら好きで、好奇心旺盛で、要領がよく、呑み込みが早く、いつも自分の後ろにくっついてきた麻耶――。

しかし、性と無縁に見えた懐かしい従妹を臉の裏に描くと、背徳感が強まってしま

う。

「つつ……あっ!？」

仕上げに蘇ったのが、公園での告白だった。あの時の麻耶は、もうただの子供ではなくなっていた。亮太郎も想いを受け止められはしなかったものの、彼女に年頃の異性を意識させられたのだ。

「うあ、おっ!？」

亮太郎はビクンと指がねじ曲がり、つい麻耶を自分の方へ引き寄せてしまった。

「きゃっ!？」

いきなり性器と急接近させられて、麻耶の声も高くなる。だが、彼女はむしろそこから一層手コキを張り切り切りました。

すでに我慢汁は竿までしたたつて、右手にとつても潤滑油となっている。愛撫のペースは、もはや皮膚もろとも神経までシェイクするようだ。ヌルつく陰茎は時に手の内から滑りかけるが、

「はああっ……んっ! はっ、あっ、はああっ……!？」

麻耶は獲物を逃すまいと、指の力を強くする。そのたびに怒張の内部で肉悦がギュッと凝縮された。

「麻耶っ……ま、麻耶っ！」

彼女を見ないでいると、他の感覚が余計に研ぎ澄まされる。

亮太郎は閉じていた瞼を、半ば力ずくで開き直した。

だが、視界へ飛び込んできた麻耶の妖艶さは、彼の想像を超えていた。

「ああんっ……はっ……んうんっ！」

小さな唇は半開きで、呼吸の合間に唾を飲む仕草が入れば、なだらかな肩まで上下する。

綺麗だった茶髪もしどけなく乱れ、一部が肌へ張りつき、一部が亮太郎の指へまとわりついていた。その煌めきの下、潤んだ瞳がペニスを憑かれたように見据え続け

「ぐ……うおっ!!」

見とれかけたところで精液の気配が強まり、亮太郎は我に返った。子種の群れは、彼が呆然となった隙をついて、竿までせり上がってこようとしている。

「う……むっ！」

亮太郎は尻の筋肉を引き絞り、それを堪えようとする。しかし、

「や……あんっ、おちんちん……また固くなってきたあ……！」

手コキで絶え間なく悦楽を流し込まれていては、上手くないかない。むしろ、力を入れたせいで、余計に精子を押し上げそうになった。

かといって、もう力を抜くのも無理だ。そんなことをすれば菌止めが失われ、本当に絶頂まで直行してしまう。

(どうすればいいんだ!?)

亮太郎が脂汗をかく間にも、頑丈な幹はググツと反り、内側まで広げかけていた。ザーメンもここぞとばかりに迫ってきて、少女の手と共に脆い尿道粘膜を挟み撃ち。肉悦を強制的に跳ね上げる。

「ぐっ……麻耶っ、出る……!! このままだと、お、お前にかかって……っ、ううっ!」
しかし亮太郎は唸りながらも、やはり従妹の髪を離せなかった。麻耶も汚されるのを拒むどころか、より積極的になる。

「うんっ、出しているの……!! ドロドロの精液……っ、麻耶にいつぱいかけてえっ!」

亀頭上の左手も筒形にして、動きを抜くものへ変化させる。こちらはやや優しく、エラ周りを愛でるようなやり方だ。しかし、敏感な粘膜にとってはそれでも限界オーバー。表面が沸騰しそうになる。

さらに美少女は赤い舌を出し、目を閉じた。細い顎も上向きにして、鈴口へ無防備な己をさらけ出す。男を容赦なく責めながら、表情ははしたなく媚びるよう。その落差が、亮太郎の興奮を後押しした。

「イッ……イクッ……麻耶っ……俺っ、もう……いいうっ!!」

叫んだ拍子に腹筋が縮まって、圧迫感は股間へ押し寄せた。それは決定的な引き金だ。巨根に収まりきれない極大の肉悦が、頭のとっぺんまで突っ走り、鈴口からはビュクンッ!

「うああああつ!!」

ゲル状のスペルマが、宙に弧を描いて迸った。

子種の通り道を狭めるために集めたはずの力も、今や起爆剤同然。弾ける解放感に拍車がかかり、愉悦の詰まっていた尿道はみるみる軽くなっていく。が、同時に粘膜を荒っぽく削られるようでもあった。

さらに視界を占めるのは、子種まみれとなっていく麻耶の美貌だ。しっとり濡れた額へも、瞼へも、頬へも、伸ばされた舌へも、ダメとなった白濁がこびりついている。「やつ、うううっ! んぶっ! ひうっ……うううんっ!」

舌に落ちる苦味のせい、鼻にかかる臭いのせいなのか、麻耶は眉を寄せ、すすり

泣きじみた声を漏らした。それでも膝立ちのまま、生臭い汁を浴び続ける。

やがて、最後に残った精子が、宙を舞って——麻耶の手首へ落ちた。

「お……………ふうう……………」

全てが終わっても尚、亮太郎は息継ぎすらまともにできなかつた。

自慰の時にはここまでたくさん、激しく飛ばした経験などない。

（麻耶に……………されたからなのか……………？）

その彼女も小刻みに痙攣して、濁流が止まったことにさえ気付いていないようである。

「はっ……………あつ……………ああ……………うっ……………はああつ……………」

「……………麻……………耶……………」

亮太郎の方が先に立ち直れたので声をかけると、従妹は身震い。そうして、やっと四肢の力を抜き、開いた手で目元を拭った。しなやかな指先もギトギトに濡れ光っていたが、片目を開けられる程度には白濁がどけられる。

「す……………ご……………お……………い……………」

呟きに混じるのは、舌の上で精液のニチャつく音だ。そのせいで声はいつもより聞き取りづらく、格段に卑猥だった。

「ね、ねえ……あたしの手……よかった……？」

「……ああ」

ここまで派手に達した以上、嘘など吐けない。後ろめたさや情けなさを頭の隅へ押し込んで、亮太郎は頷いた。

「すぐく、感じた……」

「よかったあ……。じゃあ……綺麗にしてあげるわね……」

「お、おいつ!!」

麻耶はまたも淫靡な笑みを浮かべた。ペニスを両手で握り直し、亮太郎の掌の下をくぐるようにして、顔全体を近づけてくる。

「んあっ……はあああ……っ」

目を閉じ、薄い唇はめいっばい開き、少年が逃れるより早く、先走り汁や精子の残る屹立^{きつりつ}へ舌を熱く押しつけた。

「うぐっ!!」

達したばかりの性器は、まだまだ張りつめて敏感なままだ。その側面へ粘っこく濡れた軟体がネットリと。突き抜ける痺れに、神経の一本一本が千切れそうになった。

「あおっ!!」

思考力もあつけなく形を失い、溶岩めいた代物となって頭の中で渦を巻く。

しかも――、

「ふああつ……やつ……んああむつ！」

麻耶は舌を鈴口寄りにスライドさせた。そのせいで細かなザラつきが、亀頭表面を研磨。

「うあつ!! ああああつ!!」

無遠慮な攻撃に、亮太郎は震えだす。そこら中で鳥肌が立った。

ギリギリまで下がった舌は、一旦亀頭から離れる。ただし、その際には縦長の穴に沿って、先端をチュルンと跳ねさせて。

「おうっ!!」

勢いの乗った動きで、精液の出口へは飛び切りの快楽が練り込まれた。

みっともなく喘ぐ少年。その間に麻耶は濁汁を飲み下した。

「あ……ふ、苦あ……い。で、でも……全部取っちゃうから……」

からかうように囁いてから、再び寄ってくる。

「よ、よせて……っ」

今度は亮太郎も辛うじて身構えられた。もつとも、具体的な行動には移れず、相手



の動きを馬鹿みたいに見守るしかない。舐められる愉悦を知った今、アレを何度もされるかと思うだけで、全身から新たな汗が噴き出した。まるで我慢汁のような粘つき方の汗だ。

もつとも、彼の予想は裏切られた。——過激な方へ。

「うっ……おっ……おおおっ!!」

てつきり触れるのは舌だけと思ったのに、麻耶は可憐な唇ごと吸いついてきたのである。同時に両手をペニスの上へあててがい、舐めやすい角度にしようと、左へ右へ捻り始めた。

「そ、それはっ……きつす……ぎっ!! くおおおっ!」

童貞の亮太郎にとって、これまで美少女に精液を啜られる展開など全く無縁。驚きについていけないまま、刺激の凄まじさに頭を揺さぶられてしまう。

「ちゅっ……んあっ……ふううむっ!」

従妹の唇は吸盤さながらで、肉棒の性感を無理やり引きずり出すかのようだった。指先も竿を傾けるのが主な役割とはいえ、ネバネバと濡れた状態で、粘膜や薄皮を撫でくり回してくる。

舌に至っては、一回目を優に超える密着度で白濁の残滓をこそぎ取っていた。圧さ

れた亀頭は不恰好に凹み、受ける疼きは痛いほど。それでも麻耶は執拗に、執拗に、ひたすら執拗に、従兄の急所を弄ぶ。

「んむっ……はむっ！ んふううんっ！」

「く、うお……！！ 聞けって……おいつ……！！」

剛直へ頬ずりせんばかりな美少女の姿は、餌を食べ尽くして尚、皿へむしゃぶりつく飢えたペットさながらだった。コンパで人懐っこく笑っていた時とは別人だ。

「あううん……もつとお……もつとおちんちん、気持ちよくしてあげるのお……っ」

「麻耶……ああおっ！」

もはや、動きは性器を清めるためのものではない。このままだと、二度目の昇天まで押し上げられるのは間違いないかった。

現に陰茎は、精子のせり上がってきそうな切迫感に脈打っている。根元も重たくなってきた。

「麻耶……っ！ 待てっ……じゅっ、十分の賭けはどうなった!？」

声を荒らげる亮太郎。だが、麻耶は怯むどころか、トロンとした瞳で見上げてきて、

「……ごめんね？ あたし……んちゅっ、時間計るの忘れちゃった……あ」

「な……っ！」

「だから、もう一回させてえ」

「冗談はよせっ!？」

「あ……ああお……っ」

麻耶は従兄の悲鳴などまるつきり無視して、口をますます大きく開けた。迷わず亀頭を咥え込んだらキュッと唇をすぼめる。まるで巾着を閉じるように、カリ首の裏を隈なく押さえ込んでしまった。

「んっ……はむううっ!」

「くおっ!？」

亮太郎からすれば、弱点を丸ごと閉じ込められた格好だ。

口内には体温が籠もり、唾液や我慢汁、精液による湿気ものすごい。上下左右から殺到する熱波で、亀頭が融解させられそうである。亮太郎は金縛りにかかり、抵抗はおろか、流されることへの迷いさえ忘れかけてしまった。

少年がわななく隙に、麻耶はズルッと舌を波打たせる。

「うあああっ!？」

凶器同然のあのザラつきが、裏筋を直撃だ。さらに顔までがレールを遡るように前進を開始。

「んむっ……ひっ……んんううっ……!!」

くぐもった声を漏らしつつ、美少女は奥まで肉棒を迎え入れていった。ゴツい幹は唇で扱き立て、切っ先は狭めた内頬で挟み込み。

「はっ、かっ……つつ、う……おおっ!!」

亮太郎がかすむ目で見下ろせば、性器をしゃぶる麻耶は淫猥ながらもうっとりした表情だ。従兄を気持ちよくできることが、心の底から嬉しいとでも言いたげで、濡れた嬌声もいよいよ高まる。

「んむっんむっ、あっふううむっ!」

「ま、麻耶……っ」

眼前の歪な愛らしさは、直接的な肉悦以上に胸へ響いた。

しかも彼の呟きと前後して、少女は両手を腰へ巻きつけてくる。その動きがまた、すぎるような雰囲気を強調し。

とどめに舌足らずな喘ぎ声が解き放たれた。

「お……おにいひゃんのおちんひん……っ……またっ……ああむっ……んぢゅっ、あたひがっ……イカへてあげりゅっ、のおお……っ!」

「く、うううっ……!!」

ここで『お兄ちゃん』は反則だ。

前後不覚だった亮太郎は、痴女さながらの従妹を理屈抜きで可愛いと思ってしまう。次の瞬間、両手が再び麻耶の頭へ乗せられる。

ただし、さつきとは目的が違った。これはいわば降参の証。

「麻耶……俺、もう止まれ……ない……っ、止まれないんだ！」

「う……うんっ！」

麻耶も満足げに頷くと、顔を後退させ始めた。口腔粘膜を活用して、エラを捲り上げていく。動きは極端にゆっくりで、その分、悦楽が丹念に注入された。

「おっ……くおっ、おおおっ!!」

竿への圧迫は緩まるが、精液を押さえる力も弱くなる。

亮太郎は急いで腰を引き締めた。手コキの時と違い、どうにか昇天を堰き止めることができた。代償にペニスが一層滾たぎって、感度も研ぎ澄まされるが、それを抑制する意思は薄れている。

股間から背筋まで駆け抜ける凶悪な痺れに、少年は酔いしれた。

「ひゃむ……っ!!」

牡肉の蠢きに息を飲みつつ、麻耶も口淫を継続した。強まる摩擦に、亀頭は火を噴

きそう。そして亮太郎が菌を食いしげれば、自然と腰も揺れ、剛直は内頬をかき分ける。

左右の口腔粘膜と触れ合うたび、性感帯で電流めいたものがゾワゾワと駆け回った。「くおおっ、麻耶の口……感じる……うっ！」

「んっ……ひっ、んじゅううむっ！」

言われた麻耶も後退の速度を上げて、すっぽ抜けんばかりに亀頭を逆撫でする。次の瞬間、エラ周りと唇の裏側が衝突。両者はさながら鍵と鍵穴で、カリ首が出口にズッポりはまり込んだ。

「おうっ！」

疼きに耐えきれず、亮太郎は危うく転びかける。しかも彼がよろめきかけたところで、本格的な往復が開始された。

何種類もの体液と空気をジュポジュポと混ぜつつ、美少女は奉仕に没頭。髪を揺らし、シャツで包まれた乳房も愛らしく弾ませる。頬や顎の上では、精液がねっとり伝い出していた。見ているだけで絶頂へ駆り立てられかねないあられもなさだ。

「んっ、ふあうっ！ ふっぶっ、うううんっ……おにいひゃ……ひゃっ、うううんっ！ ふじゅっ！ い……いっばひいっ感ひへえううっ！」

「ああつ……ああつ！　すごく感じるっ！」

受け入れてしまえば、舌の凹凸も、亀頭を包圍する淫熱も、素敵だった。神経が振れそうなのに、一秒たりとも離れたくない。否定したがっていたさっきまでの自分が信じられなかった。

「麻耶っ、麻耶っ！　麻耶あつ！」

従妹を呼びながら、彼は腰を突き出す。刹那、巨根の切っ先が喉を抉った。

「ふううっ!!　い……うむっ、う……え……くっ！　むううぶっ！」

「ぐっ……すまんっ！」

元が人のいい少年のこと。えづく声を聞けば、ハッと現実に戻る。だが、麻耶は反対に舌をエラへ纏わりつかせた。自分は大丈夫だと行動で示すつもりのようにだ。

「くっ……うあああおっ！」

ひたむきなやり方が、蘇りかけた亮太郎の良心に蓋をする。彼は目の前がグラつき、自分がどんな姿勢をしているのかさえ見失いそうだった。そこで一際強く、軟体に鈴口をノックされて、

「うくあああつ!!」

舌使いに応えた白濁も、陰莖内部を昇ってこようとしていた。亮太郎はそれをねじ

伏せようとするものの、もう完全には抑えきれない。性器の内部を侵食する存在感で、だんだんと崖っぷちへ追いつめられていく。

——もう終わりだなんて、嫌だ！

少年は怒鳴りたくなつた。だが、心のどこかでは絶頂が待ち遠しくもあつた。拒むつもりがなくなつた今、達する瞬間の愉悦はきつともものすごい。

せめぎ合う二つの力のせいで、肌もそこら中で異常をきたし、二の腕や肩が妖しくザワつきだしている。

とうとう喜悦と絶頂を望む気持ちが、彼の我慢を凌駕した。

エクスタシーの予感に打ち震えながら、亮太郎は麻耶へ唾を飛ばす。

「麻耶っ……俺っ、またイ、イク……ぞっ！ 受け止めてくれるかっ!？」

「んっ……うんっ！」

麻耶も頷いた。そのまま、猛烈なバキュームまで開始。

「じゅずっ！ ずぞぞっ！ ぢゅ……ずぞおおおっ！」

肉棒をストローに見立てた愛撫が、亀頭やカリ首どころか、隠された鈴口の裏側まで疼かせる。底の精液にも力が与えられて、尿道を破裂させそうだ。

のみならず、麻耶は律動でもラストスパートをかけてきた。こちらもポンプさなが

ら、竿の表面を目まぐるしく伸ばし、戻し、伸ばし、戻す。だが、急所をメチャクチャに扱われるほど、亮太郎は性欲を煽られた。

「出る……っ！ 出……えっ……イクうううっ！」

彼が腿を強張らせると、巨根は接近した麻耶の口蓋と見事に激突した。

「うぎっ！ 麻……耶あああっ！」

ひしゃげそうなのに、壊れそうなのに、固い天井とぶつかる感触は喚いてしまうほど心地よい。

思った直後、極大の痺れが荒れ狂う。まさしく仕上げの法悦だ。

「ぐっ……うああおおっ！」

白濁は尿道を一足とびに突っ切って、狭く蒸し暑い中へドクンドクンと噴き上がった。口蓋へたっぷりへばりつき、さらに奥へも雪崩れ込む。

「んぷっ……ううううっ！ ふぐっううううあっ!!」

喉を塞ぐ子種の群れに、麻耶も悲鳴を漏らし、しがみつくと腰へ爪を立てた。それでも男性器は頬張ったままだ。無意識とはいえ、果てている最中の肉棒を苦悶のあがきで振り回し、過剰な反撃をしかけてくる。

「おっ……おっおおおっ!! 麻耶あっ!!」

牡肉を崩壊させそうな愉悦に、とうとう亮太郎は追いつけなくなってしまった。

「うあつ、あああああつ!!」

自分が責めているのか、責められているのかも分からなくなって。

彼は延々と喘ぎ続けるのであった――。

数分後。

「はあつ、はあつ……くつ、はあつ……はああつ……」

麻耶が男根を吐き出すなり、亮太郎は下半身も露あらわなみつともない格好で、床へへたり込んでしまった。

しかし前を見れば、麻耶も横座りで項うなだ垂れている。

「あ……んっ……あああ……」

彼女の肩は大きく上下し、最初に見せていた余裕など跡形もなく失せている。瑞々みずみずしい肌は白く汚れたままで、そこに浮かぶ珠の汗が、ザーメンへヌメリを与え続けていた。

「お兄……ちゃん……」

麻耶が虚ろな視線を投げかけてきた。彼女は従兄と視線が合うなり、「あ……っ」

と俯いてしまうが、後ろ髪を引かれるのか、また伏し目がちにチラチラと様子を窺い出す。

「うっ……!」

恥じらいめいた仕草に、いまだ勃ったままのペニスが大ビクンと痙攣した。

「……え、嘘っ……二度もイッてるのに……」

麻耶の吐息は、驚いているようでありながら、どこか妖しく響く。後ずさっても少年へにじり寄ってきてても、おかしくなさそうだ。

とはいえ、従妹が取った行動は、そのどちらでもなかった。彼女はベッドへ手をつき、ふらふらと立ち上がったのである。

「あ……あたし……シャワーを浴びてくるわね……。おにい……せ、先輩、今日は泊まっていくでしょ？ 電車、もうないと思うし……明日は日曜だし……」

「何だって?」

ベッドの枕元に置かれた目覚ましを見ると、針は夜中の一時二十分を指していた。これでは麻耶の言う通り、終電もとつくに過ぎている。

ふふっ、と麻耶が気だるげに笑った。

「十分は経っちゃったみたいね……。勝負は先輩の勝ちってことにしておいてあげる」

そのまま覚束ない足取りで、浴室の方へ行くこうとする。

「麻耶っ」

亮太郎が後ろ姿へ呼びかけると、麻耶はピタリと足を止め、振り返らないままに言い放った。

「先輩は……あたしに告白とかしないでね？」

「んな……っ?!」

少年が固まっている間に、彼女はまた歩き出す。汗だくの肢体は、すぐにドアの向こうへと消えてしまった。

（それって……）

亮太郎は頭の中で、今のセリフを再生してみた。

——あたしに告白とかしないでね？——

（つまり、自惚れるな……ことなのか？）

それが妥当な解釈に思えた。彼女にとっては、手コキもフェラチオもスキンシップの延長に過ぎないのだろう。思えば、彼女がセックスについてどういう価値基準を持っているかさえ、自分は知らないのだ。

少なくともこちらへの恋愛感情は、告白を断られた時点で終わっているに違いない。

その気になりかけていた亮太郎は、ズキリと胸が痛んだ。

(……勝手だな、俺は)

自己嫌悪も覚えた。

※ ※ ※ ※ ※

「うう……精液って……なかなか取れない……」

浴室で髪感触を確かめながら、麻耶は呟いた。それでも何度かすすぐうち、しつこいヌメリはなくなってくる。

(……さつきはやりすぎちゃったみたい)

フェラチオまでするつもりなんてなかったのに、ペニスの逞しさを見るうちにヒートアップしてしまった。

友人が知ったら『もっと利口になりなさい』『それ、サービスしすぎだっば』と呆れるかもしれない。

(で、でも行動的なのは悪くなくて……。……悪くないわよね……。?)

やりたいアイデアはきっちり実行。だからこそ、あたしのはず。

これをやめてしまったら多分、言いたいことの一つも言えなくなる。
そう自分を納得させて——麻耶は思い切りよく頭から湯をかぶった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>



Valkyrie
http://www.comic- Valkyrie.com/

cranberry
http://www.cran-berry.com/

mille-feuille
http://www.mille-feuille.jp/

モバイル二次元ドリーム
http://www.2d-dream.jp/

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!